

学校へいけない子どもたち

私は戦争がなく平和な世界になってほしいと思います。私はユニセフのホームページで1日に約8000人の子どもたちが死んでしまうことを知りました。私の通う大平小学校のせいとは全校で約420です。つまり一日で大平小学校の約20倍の子どもが死んでいることになりました。それだけではありません。学校に行けない子供は、約2億6400万人います。日本の人口の約2倍の子どもが勉強できないのです。そして、世界の中で安全な水が飲めない人が約21億人(世界の人の10人に3人)います。

私は世界中の人たちに食料があり、安全で、平和な世界になってほしいと思っています。



私達の国際協力

知る 伝える 行動する

夏休みの工作で、ユニセフ募金箱を作りました。世界には私たちのように毎日ご飯を食べたり、学校にいたり、戦争の心配のない子供がいます。でも食べるものがなかったり、病院に行けなかったりして、毎日たくさんの子供が死んでいます。そのことを知り、協力してもらいたい、協力してもらうためにユニセフ募金箱を作りました。これから、おおぜいの人に協力してほしいと思います。(優空記者)

私たちは、去年JICA地球広場に行って勉強してきました。あと、ユニセフや、国連についても勉強しています。これから勉強したことをお友達に教えて、国連やユニセフのことを知り、もらいたいです。(愛里記者)

僕たちのお父さんは、昔青年海外協力隊としてマレーシアで活動していました。僕も大きくなったら協力隊や国連職員として世界のためにがんばりたいです。(慧海記者)



ユニセフ募金箱をつくりました。

国連新聞

国連・ユニセフと日本

国際連合は1945年にできました。日本は1956年に加盟し、今年で61年目です。日本は第二次世界大戦の戦火によって日本は焼け野原になりました。その後、日本はユニセフを始めとする国際社会から援助を受けて日本は復興しました。ユニセフは第二次世界大戦の後、15年間子供たちに「粉ミルク」の支援をしてくれました。その後、日本は経済発展をとり、支援される国から支援をする国になりました。日本は政府開発援助(ODA)で、開発途上国をするなど積極的に国際貢献をしてきました。JICAや青年海外協力隊もそのような活動のひとつです。

そして、2011年の東日本大震災でもユニセフは子供たちの支援をしてくれました。日本と国連、ユニセフの関係は今ではとても大きなものとなっています。



戦争後の給食と東日本大震災のユニセフ活動
※ユニセフHPより

世界のきびと日本のたべのこし

私は夏休みの読書感想文で「命をいただく」という本を読みました。その本はもうちゃんと言う牛糞飼っていた家族が、もうちゃんを売らないとお正月ができないので、もうちゃんを肉にしたお話しです。私はその本を読んで悲しかったです。でも、お肉になってみんなのためになったので、いいのうにかんしゃしました。

私はそのあと日本での食べ残しを調べました。



日本の食べ残しの量は、約640万トン。そして、食料えんじょが約400万トン。日本人が食べ残しているほうが多いことがわかりました。私は残さず食べるのが大切だと思心かづけています。